

通学合宿「うずしお交遊塾」 実施報告

- 1 趣 旨 今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、家庭での親子のふれあう機会の減少、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。これらの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をするを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。
また、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、地域の安全・防災について主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
- 3 後 援 南あわじ市教育委員会
- 4 日 時 平成30年1月24日(水)～27日(土) 3泊4日
※高校生リーダーと大学生ボランティアは前泊(23日)して事前研修を実施
- 5 場 所 国立淡路青少年交流の家
- 6 対 象 南あわじ市立南淡中学校区小学3～6年生
南あわじ市立南淡中学校1・2年生
兵庫県立淡路三原高等学校生及び吉備国際大学生(高校生リーダー、大学生ボランティアとして)
- 7 参加者 33名(小学生18名、中学生10名、高校生1名、大学生4名)
- 8 日 程

	16:00 18:00 18:30											20:30 21:30	
1月24日(水)						受入所説明	夕食	開塾式 ＜活動Ⅰ＞ みんなで仲良くなろう！ (自己紹介・交流会)				入浴	就寝準備
	6:30	7:00	7:30	8:00	16:00 18:00 18:30			21:00 21:40					
1月25日(木)	起床	朝食	登校	学校	交流の家の家着	自習	夕食	＜活動Ⅱ＞ 3Dハザードマップ(立体)を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。			入浴	就寝準備	
	6:30	7:00	7:30	8:00	16:00 18:00								
1月26日(金)	起床	朝食	登校	学校	交流の家の家着	自習	＜活動Ⅲ＞ 防災サバイバルキャンプを体験してみよう！ ・班のみんなと協力して夕食や寝床を作ろう。				班毎に就寝		
	6:00	9:00		11:00 11:10 11:30									
1月27日(土)	起床	朝食作り	住居撤去	＜活動Ⅳ＞ 防災サバイバルキャンプをふりかえろう！ ・災害時に必要な「物」や「能力」について考えよう。			記入シート	閉塾式	解散				

※高校生リーダー及び大学生ボランティアは、毎晩22:10～22:40に「リーダー・ボランティアミーティング」を実施。

9 内 容

① 前日研修(高校生リーダーと大学生ボランティア)

セッション1では、「ボランティアの役割」について、今までのボランティアの経験からいろいろな意見を出し合った。それをまとめていくうちに、「4つの管理」が大切なことが分かってきた。(安全管理・生活管理・健康管理・タイム管理)

セッション2では、参加者との交流会について、大学生ボランティアが計画した「アイスブレイク」の内容を提案し、進め方と役割分担を行った。「参加者同士が班の仲間と打ち解けて楽しい雰囲気になりたい」という意見でまとまった。時間が進むに連れて、自分のやりたいボランティア像がはっきりしてきたのか、早く子どもたちとかかわりをもちたいという意欲が伝わってきた。

② 1日目 開塾式・活動Ⅰ：みんなで仲良くなるろう！

小学校の中学年児童、中学生が多数参加した。更に、高校生、大学生の参加によって、より充実した異年齢集団活動が可能となった。

開塾式では、所長より「うずしお交遊塾」での心構えとして、「自然は手加減しないこと」「仲間と共にチャレンジすること」等が伝えられた。引き続き行われた「活動Ⅰ：みんなで仲良くなるろう！（交流会）」では、和やかな雰囲気での活動となった。その後を実施されたミニ講義「ロープの結び方の練習」では、次長より「巻き結び」と「自在結び」を教わった。26日にある防災サバイバルキャンプに必要な技術であり、仲間と協力しながら繰り返し練習をしていた。

就寝後の「リーダー・ボランティアミーティング」では、今日の活動をふりかえり、「いい雰囲気でした。」「アイスブレイクで十分に説明ができなかった。」と成果と課題を挙げ、改善策について話し合った。小中学生とのかかわり方については、「注意をしようかどうか迷っている。」「風呂、部屋の片づけができていない。」等、生活面の問題点について意見が出された。「規範作りをしっかりと」「生活面の指導を丁寧にする」等、小中学生への対応の仕方について共有することができた。なお、このミーティングは、毎晩行い、スタッフ・ボランティア間で情報を共有し、次の日の活動に活かすことを目指した。



【Episode 1】通学合宿ならではの！

参加者は、6時半に起床し、素早く身支度を済ませて朝食会場の食堂に集まり、高校生リーダー、大学生ボランティアの声掛けでスムーズに朝の活動ができた。

出発時刻になると、大学生ボランティアが手を振って見送る中、マイクロバス、自転車、徒歩でそれぞれの学校に登校して行った。

夕方になり、交流の家に帰ってきた参加者は、事務所に「ただいま！」と元気の良い声で挨拶に来た。職員からも、「お帰り！」と温かく声を返す場面があり、家庭的な雰囲気でまさに参加者の「家」であった。

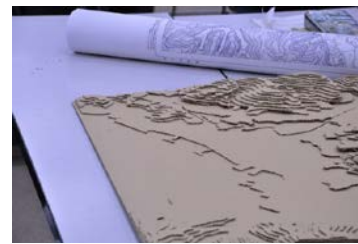
小中学生の表情を見ると、たくさんの家族が一度に増えたようでとてもうれしそうだった。

宿題を済ませた後、トランプやカードゲームで遊んだり、おしゃべりをして楽しんだり、同じ学校以外の友だちとも積極的にかかわろうとする場面も見られるようになってきた。

③ 2日目 活動Ⅱ：3Dハザードマップ(立体)を作ろう！

活動Ⅱ「3Dハザードマップ(立体)を作ろう！」では、兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科准教授 嶽山 洋志氏を講師に迎え、立体的な地図を作製し、地域の危険箇所を推測することで地域の安全・防災について考える機会をもった。ダンボールに等高線の入った地図を仮止めし、10m毎にダンボールをカッターで切り取り、積み重ねて、のりづけするという作業を根気強く、繰り返し行った。

最終日に自分たちの作った3Dハザードマップを見て、気が付いたことを付箋に書いて意見をまとめた。「(津波が最高点まで到達すると)建物の所に津波が来る。」「広い道を通って、早く学校や高い場所に避難をしないといけない。」等、平面の地図では分かりにくいことも、高低差の分かる3Dマップを指で示しながら確認し合うことができた。



【Episode 2】ボランティア同士のつながり！

2日目の3Dハザードマップ作りの時、1人のボランティアが授業のため、遅れて活動に参加した。遅れてきた仲間のボランティアの耳元で、「自分が分からなかったら、サポートできんよ。分からんことがあったら何でも聞いてよ。」と声を掛けている姿を見て、頼もしさと成長、スタッフの一体感を感じた。

④ 3日目 活動III: 防災サバイバルキャンプを体験してみよう!①

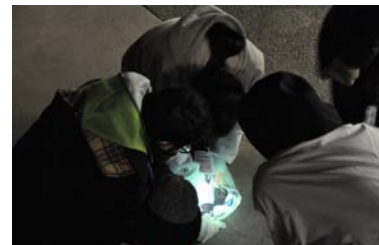
「防災サバイバルキャンプ」は、与えられた用具や道具（ブルーシート、PP ロープ、寝袋、ロールマット等）を用いてシェルターを作り、真冬の屋外で一晩を過ごす活動である。設定は、過去の震災時に起こった事例から、「避難所に多くの人が詰めかけて収容しきれない、救援物資が十分に手に入らない」という条件がメンバーに与えられた。薄暗い上に、強い風が容赦なく吹き付け、シェルター作りをより困難にさせた。できあがったと思ったシェルターは無残にも強風に煽られ、作り直した班もあった。

就寝前に健康観察と諸連絡を行った。自らの力で乗り切る覚悟をもたせることも大切だが、体調不良時にはログハウスに避難するよう注意を呼びかけた。屋外での活動もすでに5時間以上が経ち、それだけでも寒さに耐え、よく頑張っていることを称賛した。

【Episode 3】 やっと火がついたよ（涙）

夕ご飯作りでは、ファイヤースターターを使用して火おこしを行った。初めて使う道具に興味津々であったが、なかなか着火せず意気消沈している班もあった。

1時間してやっと火をおこすことができ、粘り強く作業を繰り返した仲間に「ありがとう。」「よく頑張ったね。」等、感謝の気持ちを伝えている心あたたまるシーンがあった。食事の後も力を合わせてシェルター作りの続きを行った。



【Episode 4】 どうするかは自分で決めよう!

寒波の影響で雪が舞い、冷え込みが厳しい1日だった。野外炊飯の夕食を終えた後、ある参加者が大学生ボランティアに寒さに耐えられないと相談をしに来た。大学生ボランティアは、「よく考えて自分で決めよう。自分のことなんだから。誰も文句は言わないよ。」と声を掛けた。

夕食後、しばらく経ってうつむき加減にゆっくりとログハウスに向かう背中から悔しさと無念さが伝わってきた。大学生ボランティアは、自分で決めたことを称賛した。「次こそ、頑張れ!」

⑤ 4日目 活動III: 防災サバイバルキャンプを体験してみよう!②

朝日に照らされて周りが明るくなると、シェルターの全体像が浮かび上がってきた。ロープワークを駆使して固定されたもの、竹を支柱にして空間を確保したもの、風に煽られないように低く流線形にしたもの等、随所に工夫が見られた。

仲間と協力し、創意工夫を凝らしたのがよく分かる。その後、サバイバルキャンプについてのふりかえりを行った。

⑥ 4日目 活動IV: 防災サバイバルキャンプをふりかえろう!

サバイバルキャンプの感想を班毎に1人ずつ発表した。「寒くて寝られなかった。」「足が寒かったので、次は靴下を2枚はく。」「自在結びをして、周りの木に固定できた。」「風を防いでいないところがあった。」「火をおこすのが難しくて、なかなかご飯が食べられなかった。」等、具体的な場面を思い出しながら、工夫したことや次回気を付けることについての意見が出された。

防災サバイバルキャンプへの挑戦によって、「自然は容赦しないこと」「協力することの大切さ」を身をもって体験し、痛感したことを全体で共有することができた。

最後に、南あわじ市教育長 浅井 伸行 氏より「防災、なぜ学ぶ?」という演題で、講演をしていただいた。自分が体験したことを伝える（広げる・つなげる）ことが大切であり、震災で受けた教訓や防災意識を心に刻み、薄れさせないようにしなければならない、というメッセージをいただいた。

実際にあった出来事、出会った人々を例に、これからの生活で活かすことややらなければならないことについて、参加者に語りかけるようにお話くださったのがとても印象的であった。



⑦ 事後のふりかえり(高校生リーダーと大学生ボランティア)

1日目のリーダー・ボランティアミーティングの時に、「規範作りをしっかりする」「生活面の指導を丁寧にする」等、小中学生への対応の仕方について共有した。ただ、実際の活動場面では、「作業内容とは違った活動をする小中学生に注意ができなかった。」「自分がすべてやってしまうことが子どもたちの成長を邪魔しているのではないか、という迷いが生じサポートを躊躇してしまった。」という意見が出た。

子どもたちに任せて見守るのか、それとも優しくサポートするのか、事前研修で学んだ「4つの管理」については積極的に声を掛けて規範意識を高め、参加者個々の生活習慣の改善やスキルの向上についてはしっかり見守っていくことを確認した。

事業のねらいを把握し活動内容や手順を理解してサポート体制を整えること、参加者の役割分担をしっかりすることなど、小中学生とのかかわり方の改善策について、小中学生の目線に立ったふりかえりができた。



【Episode 5】また、帰っておいで！

防災サバイバルキャンプ後の感想文に、「とても寒かったと同時にとても面白かったです。シェルターを自分たちで作ったので、達成感もちながら寝ることができました。この家で『家族』ができ、みんなで協力できてとても楽しかった。長いようで短かったです。」と書いている参加者がいた。

別々の所から集まった参加者でありながら、ひとつ屋根の下で活動・生活を共にした「家族」だったと改めて感じ取ることができた。

10 参加者の声

<小中学生の感想> (事後アンケートより抜粋)

- キャンプが大変だったけど、超楽しかった。
- 防災の大切さやサバイバルの大変さがいろいろ分かった。これからも学んだことを活かしていきたい。
- なかなかできない体験ができて本当に良かったと思います。いい体験をさせてもらって本当に感謝しています。
- 3Dハザードマップを作ると、どこまで津波が来るのかよく分かった。
- サバイバルキャンプでは、自然の怖さ、みんなと協力することの大切さを学びました。

<高校生リーダー・大学生ボランティアの感想> (事後アンケートより抜粋)

- 自分も南あわじ市に住んでいるので、防災は必要と感じた。また、小中学生の思っていることや感じていることを参加者目線で話を聞けるのはよい機会だと感じた。
- 子どもたちに教えて貰うことがばっかりでとても良い経験になった。短い期間でしたが、心を少しでも開いてくれたことがとても嬉しかったし、楽しかった。
- アイスブレイクの基本をマスターしたい。反省するだけでなく、しっかり勉強しようと思った。
- 子ども同士の助け合いのシーン、「年上の子がリーダーシップをとり、年下の子をリードする」という場面を数多く見ることもできた。

11 成果と課題

【アンケート調査票から】

事業の総合評価では、「満足」「やや満足」と回答した小学生は100%、高校生リーダー・大学生ボランティアも100%という結果から、概ね活動内容に満足していると考えられる。満足度に「3」をつけた参加者の多くは小学3年生の児童であり、中学年の児童にとってはやや厳しい活動内容であったことがうかがえる。要項やチラシでの広報の段階、案内の手紙や直接の電話対応時に活動内容についてしっかり伝え、ある程度の気力と体力等の備えや覚悟が必要なことを確認する必要性を感じた。

【通学型の合宿だからこそ見えるもの】

通学型の合宿は、昼間は学校で勉強し、夕方交流の家に帰って来るといった特徴があり、子どもたちにとっては、「家」を感じられたのではないかなと思う。「ただいま！」と事務室の職員に元気な声で挨拶する子どもたちの姿や「お帰り！」とあたたかく迎える職員の姿が昨年度同様、印象に残った。

参加者が学校に行っている間に、スタッフ間でスケジュールの確認や問題点の修正ができることもこの事業の特徴である。運営側が一枚岩でサポート体制を作れたことは、参加者にとって安心感を得られたのではないかと感じた。用具の片付け、偏食、身の回りの整理整頓等、生活面で気になることもいくつか見受けられ、教育施設として何ができるのか、どこまで支援できるのかということも今後の課題として取り組んでいく必要がある。

【防災プログラムの活用】

◆「防災」への意識を高める体験活動

「3Dハザードマップ作り」では、作業の「質」と「量」に対して、「時間」と「参加者の技能」のバランスが合致しておらず、活動時間内にマップの完成までには至らなかった。しかし、仕上げられなかった悔しさより、活動に没頭できた充実感があった。それ以上に「みんなで協力して作った」一体感が得られたことに、この活動の魅力を感じた。

「防災サバイバルキャンプ」では、限られた用具と道具を使って、一夜を過ごす（食と住）活動であった。必要な知識と技術を活かし、仲間と協力しながら活動する必要があったが、どの参加者も醍醐味を感じ取れた様子であった。アンケート記述から、「自然は容赦しないこと」「仲間と協力することの大切さ」「防災意識を常日頃からもつこと」等、実体験から学ぶことで参加者の心に深く刻まれたのではないかと感じた。

【望ましい人間関係の育成】

◆異年齢集団での活動を通して

参加者の小学生と中学生、高校生リーダー、大学生ボランティアの「異年齢集団としてのかかわり方」について、学びの多い機会となった。部屋割り、活動班は異年齢で構成した。

宿題後の自由時間は、同じ学校の友だちでの活動に偏ることが多かったが、異年齢での班構成にすることでその関係性を崩すきっかけを作り、異年齢で活動するように意図的に仕組みながら「新しいつながり」を構築することができた。

中学生は、意欲的に活動する傍ら、小学生を気遣ってサポートする場面も見られ、6年生児童とともに中核的な存在として本事業を活性化していた。

【より充実した事業にするために】

◆学校、関係諸機関等との連携

事業前に、南あわじ市の校長会で「うずしお交遊塾」についてご紹介させていただき、本事業へのご支援・ご協力をお願いする機会をいただいた。事業中も、登下校時の安全面のことや登校時刻についてご意見をいただき、通学路のパトロールやスケジュールの調整を行うことができた。

兵庫県立淡路三原高等学校、吉備国際大学には、4泊5日（高校生、大学生は事前研修で前日に1泊）という長期のボランティア活動でありながら、本事業への参加にご協力をいただいた。

3Dハザードマップ作りや最終日の講演では、外部講師を招き、防災を切り口にした本事業の趣旨に迫ることができた。また、南あわじ市都市計画課より、地形図のデータをお借りすることができ、より正確なマップ作りが可能となった。

今後とも、各学校や関係諸機関等と連携し、本事業の趣旨にもある「異年齢の青少年が集って共同生活をするを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う」ためにも事業内容について検討を重ね、中1ギャップ解消プログラム事業として、更に実用性・汎用性のあるプログラム内容となるよう改善していきたい。



主 催 国立淡路青少年交流の家
〒656-0543 兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39
TEL 0799-55-2696 FAX 0799-55-0463
<http://awaji.niyego.jp/hp/>

体験の風を
おこそう